

## 地域貢献とメディアの関係

明田川 紀 彦\*

### Relationship of Regional Contribution and Media Communication.

Norihiko AKETAGAWA\*

#### Abstract

It is reported that our department is committed to contributing to the local community, Industry Division Group, Inagi City Society of Commerce and Industry. The purpose of the regional contribution activities is the improvement of the motivation for the specialized subjects and career awareness of the students. In the activities, all students had a great action respectively, so they were able to obtain significant achievement. Visible to the achievement of specialized subjects was obtained. And exchanges between the generations has been observed.

#### 1. 要旨

本学科は、正課外活動としてフィールドワークに地域交流活動を取り入れ、地域貢献と共に学生のモチベーションとキャリア意識の向上をテーマに教育活動を行ってきた。併せて世代間の交流と教育効果の可視化が付帯効果として挙げられる。地域交流活動のパートナーとしては、稲城市役所、稲城市商工会工業部会（以下、工業部会）、稲城の梨生産組合、こまざわ幼稚園、学童保育など地元の団体を基本にしてきた。

稲城市商工会工業部会は規模の大きい商工会ではないが、世界の第一人者に相当する会社があったり、日本のトップメーカーの試作を請け負っていたりと、最先端の技術が地元で活躍している。しかしながら、いわゆる町工場の多くは、設計や生産技術には長けているが、アイデアや表現と言った商品企画を苦手としている。そこで、学んだことを実践する場として、学生のアイデアを工業部会の設計技術と製作技術で実現する産学連携を平成17年度から行ってきた。本報告では、工業部会との地域交流活動を中心に、活動内容からその成果までを報告する。

#### 2. 地域交流活動の目的

工業部会との地域交流活動の目的は、産学連携による協働事業を通して学生のモチベーションとキャリア意識の向上である。

学生のモチベーション向上には、学んだことを実践することで得られる達成感を伴った成功体験が非

常に重要な要素と考える。メディア表現学科のディプロマポリシーは、情報を効率的に選別し、さまざまなメディアで活用する情報デザイン力と、その情報から新しいものを生み出していく表現デザイン力によって「自分らしさ」を最大限に表現し実現できる情報表現力を有し、かつ社会で求められるリーダー

\*人文学部 メディア表現学科

シップを備えた現代女性としての諸能力を有していることとしている。正課科目で学んだことを授業内でとどめるのではなく、実学として、学んだことを実践することができる機会が必要不可欠で、教育効果の可視化として学生自身が成果を実感できるよう目標としてきた。本学科では、学科設立時よりフィールドワークやインターンシップなどの実践科目、リテラシーや専門実習、卒業研究などの実習科目が1年次から多く開設され、いち早く実学を実行してきた。またプロジェクト活動として課外活動の地域貢献活動も並行して行ってきた。こうした取り組みにより、早い年次からモチベーションの向上が図られてきた。

キャリア意識の向上としては、中等教育課程においても職場体験等で多く行われている就業体験での経験をインターンシップ(3年次前期)と共により発展させることと考える。決して下請けやアルバイトのような形態ではなく産学協働として進めることが重要である。併せて現在進行形で学んでいることの社会的な位置づけを理解することも非常に大切である。2年次の基礎ゼミを中心とした地域交流指導(前期集中)と地域交流(後期集中)による工業部会との協働事業を通して、親世代や祖父世代の人たちと共に活動を行う世代間交流が行われ、結果キャリア意識の向上に繋り、併せて、工業部会員が経営している仕事内容から中小企業の社会における役割等の理解にも繋がっている。現在、学生の属する世帯は、ほとんどがサラリーマン世帯であり、自営業主など商売をしている世帯は、毎年度1学年につき数名程度で学年全体の10%にも満たない。これは本学科に限ったことではなく、社会全体の割合として88.3%<sup>1)</sup>がサラリーマン世帯であり、また大学進学率が54.5%<sup>2)</sup>であることからするとだいたいこの程度であろう。こうしたことは、インターンシップをはじめ、授業と結びついたキャリア教育を通して、特に就職活動において中小企業を含めた社会構造を理解する一助になると考える。

### 3. 稲城市商工会工業部会について

稲城市商工会(以下、商工会)は、会員数404名で昭和45年に設立され、商業部会、工業部会、建設部会、青年部、女性部の5つの部会で構成されている。現在の会員数は795事業者で、うち工業部会の会員事業者数は132社である。工業部会員の中には、世界の第一人者に相当する会社があったり、日本のトップメーカーの試作や一次下請けの会社であったりと総合商社のように有名ではないが、優良企業が多く在籍している。

商工会では、中小・小規模事業者の経営改善と地域振興を計画の中心にしている。東京都の補助事業である経営改善普及事業など事業者の経営支援はもちろんのこと、新・地域社会の活力増進事業として「くらし彩り稲城の商業振興計画書」に基づき商業の活性化も図っている<sup>3)</sup>。工業部会は、(1)産業大学講座事業、(2)産・学・市民交流推進事業、(3)ものづくり推進事業の事業を進めており、(2)、(3)の事業において本学科と共に地域交流活動を実施している。

### 4. 工業部会との地域交流活動

工業部会との地域交流活動は、毎年10月下旬に開催されているいなぎ市民祭産業まつり部門で行われるイベント「ものづくりコーナー」の企画と運営のサポートを行う協働事業である。この「ものづくりコーナー」は、将来のある子供達にものづくりの楽しさや大切さを体験・理解してもらい日本経済の担い手を育成することを目的に、工業部会のものづくり推進事業<sup>3)</sup>として進められている。本学科としては、2年次の基礎ゼミⅢ(前期)及び同Ⅳ(後期)を中心に地域交流指導(前期集中)、地域交流(後期集中)を連係してイベントへの企画・運営サポートを行っている。

活動期間としては、2年次の年度初めの4月からいなぎ市民祭が開催される10月下旬、そして総括を行う11月上旬までである(表1)。

表1. 地域交流活動のスケジュール

期日	1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期
基礎ゼミ	メディア表現学科						
基礎ゼミ	工業部会		産業まつり 産業展示				
地域交流活動	会場						
地域交流							工業部 工業部

基礎ゼミにおいては、全期間にわたって学内で作業を行っている。4月から5～6週をかけてものづくりコーナーで子どもたちが作るキットのアイデアデザインを行う(図1)。

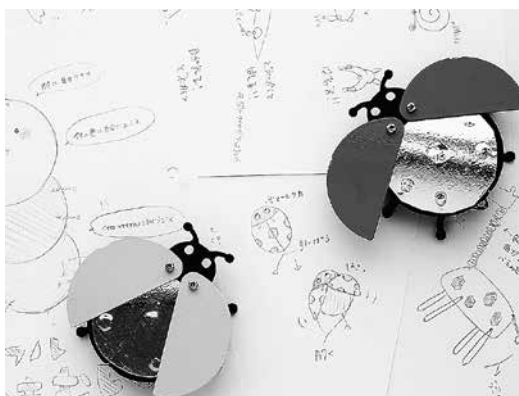


図1 アイデアスケッチとてんとう虫

学生がアイデアしたスケッチをもとに工業部会員の工場各社でキットに仕上げる。鉄製の部品で作られたてんとう虫。

学生は、小学校低学年の子どもがドライバーやハサミを使い、かつ組み立てに少々難しいと感じるようなおもちゃのデザインを自由な発想をもとにアイデアスケッチにする。難しいと感じるようにする理由は、子どもが自分の力で完成させた時の喜び、それを宝物のように大事にする愛着心を持ってもらうためである。この学生のアイデアスケッチを基に設計会社で図面に起こし、金属加工会社をはじめ製造会社数社で試作からキットに仕上げる。これらすべての工程をメイドイン稲城として工業部会員の事業者で行う。



図2. 産業まつり部門会場

手前側が会場の総合体育館入口。入口側に一般展示ブースが立ち並び、その奥がものづくりコーナーの会場になっている。

いなぎ市民祭産業まつり部門は、工業部会員の事業者による市民向けの一般展示をメインに行っている(図2)。

メディア表現学科も一般展示を行い、学科広報から学園の紹介まで行っている。「ものづくりコーナー」については後項で詳述するが、2日間行われる市民祭のそれぞれの日の午前午後1回ずつ開催される産業まつり部門における目玉イベントになっており、毎年開場前に整理券を求めて行列ができる程人気である(図3)。



図3. 開場前の行列

開場時間(午前10時)直前には、整理券を求めて行列ができる。

本学科としては地域貢献として、子どもたちに作り方を指導するイベントのサポート(図4)と会場を盛り上げる工業部会を紹介するポスター展示と映像上映を行っている(図5)。



図4. ただいま製作中!

女の子になしのすけクロックのムーブメントの取り付け方を教えているところ。



図5. 会場を彩るポスターと映像

会場を取り囲むようにポスターを設置・展示し、その間に映像を上映するモニターを設置している。

ポスターと映像に関しては、地域交流指導の正課外活動を利用して工業部会員の工場取材している。工場取材に関しては学生の時間割と調整して行うが、各事業者の都合に合わせ、主に17時以降の時間帯で行っている。当然のことながら取材を受ける事業者はボランティアである。取材は、



図6. はじめてのインタビュー取材

金型工場で職人さんにインタビューをしているところ。こちらが用意した原稿の内容だけでなく、職人さんからいろいろと教わることができました。

インタビューからカメラ、音声、照明等すべて学生らが行い(図6)、ポスターや映像の素材にする。

こうしたインタビュー取材を通して第三者とのコミュニケーション力が養われる。また取材の際、多くは社長や工場長といった役員クラスの方が対応してくれることもあり、学生らにとっては用意した原稿以上のことを話してもらえて会話の中から相当勉強になっている。

既述の通り学生のほとんどはサラリーマン世帯出身である。そのため、中小企業の現状や地域貢献の役割等理解する機会がほとんど無いといえる。そこで、この取り組みのはじめと終わりに工業部会の役員や元役員の方々に直接講演して頂き、交流や勉強会を催している(図7)。



図7. 工業部会との交流勉強会

工業部会の役員の方々へ外部講師として基礎ゼミに参加してもらいました。仕事のことであったり、ものづくりの考え方等たくさん教えて頂きました。

全行程の前半で行う交流勉強会は、取材や市民祭に参加する際の事前準備として非常に有効である。また、市民祭後の総括として話し合う機会を設けることで学生らが気付かなかったことや、またその逆も交流勉強会を通して互いに理解を深められている。

## 5. 「ものづくりコーナーについて」

既述の通り、「ものづくりコーナー」は、いなぎ市民祭産業まつり部門のイベントの一つである。このイベント以前は、アイデアコンテスト<sup>4)5)6)</sup>やロボットと遊ぶ<sup>4)</sup>、ロボットバトル<sup>7)</sup>、ロボットショー<sup>8)</sup>などロボットを中心とした見せ物がほとんどであった。平成19年度から金属部品を組み合わせるクワガタと蝶の模型を作ることから「ものづくりコーナー」が始まった。本学科はその第一回から運営のサポートを行ってきた。当時は教科「情報」の教職員養成課程があったこともあり、課程を履修している学生らに参加をさせる程度と本学科としてもけっして大きなイベントではなかった。その後「ものづくりコーナー」も年度を重ねる毎に、地域に浸透してきて、整理券を入手するために行列ができる程の人気のイベントになってきた。現在は、カリキュラム変更に合わせて、

2年次の基礎ゼミを中心にして地域交流指導(前期集中)、地域交流(後期集中)の正課外活動として全面参加している。

「ものづくりコーナー」は、市民祭が開催される2日間の午前午後1回ずつ、計4回行われている。1回の定員は50名である。このイベントの告知は教育委員会を通して市内の全小学校にチラシ配布されていることもあり、参加者の多くは小学校低学年から中学年である。昨今の子どもたちの遊びの影響もしてか、プラモデルのような組み立て型のおもちゃや、ドライバーを使った工作は苦手のようなのである。参加した子どもたちにアンケートをとってみると難しかったと答える子どもたちが毎年6割から7割となっている。子どもたちが組み立てるに際して、工業部会の人たちとともに学生が手伝ったり教えたりして完成させるが、学生にとっては、自分たちがアイデアを出したものが製品化されること、子どもたちの感謝の言葉「ありがとう」を声がけされることで達成感を実感できる。そのときの学生の笑顔は素晴らしく輝いており、こうした地域貢献活動の目的が達成された瞬間でもある。参加学生の感想を以下に列記する。

- ・ 子どもも親もできあがった時によるこんだ姿を見て私もうれしくなりました。
- ・ 子どもたちはすごく素直で一生懸命作っていたので、教えた自分まで嬉しかったです。最後に「楽しかった?」と聞いたら「うん」といってくれたので「ものづくりコーナー」に参加して良かったと思いました。
- ・ 子どもたちにどう説明したら分かりやすく伝わるかが難しいと思いました。子どもたちが最後に楽しかったと言って笑顔で帰っていったのがとてもうれしくて、疲れたけど参加して良かったと思いました。
- ・ 子どもたちが「ものづくりコーナー」で楽しそうに作っていました。完成すると笑顔で持ち帰ってくれて、一緒に作って良かったと思うことが多くありま

した。子どもだけでなく大人の方ともお話をする機会があって楽しくふれあうことができたと思います。

## 6. まとめ

工業部会との地域交流活動の目的は、地域貢献活動を通して学生のモチベーションの向上とキャリア意識の向上である。2年次の基礎ゼミと集中講義の地域交流および地域交流指導を連係させて運営することで、当初の目的は達成できたと考えられる。就業体験やインターンシップは、学生ら本人も経験済みもしくは意識を持っているので、学科の専門科目としてそれらの発展系として開講することで今後の学業や就職活動に繋げられる。特にモチベーションの向上に関しては、世代間の交流、教育成果の可視化という点で目に見える効果が現れたといえる。かつ、学生の評価も良いので今後も継続して取り組んでいきたい。こうした取り組みの結果、アルバイトとしてその後も地域活動を続けていく者、インターンシップとして工業部会の事業者に参加する者、さらにはアルバイト後、その会社に就職した者もでてきた。現在は、取材と教室での制作が主な活動であるが、今後は、工業部会との調整など積極的に係わらせることで、対外的な折衝などディレクターのような総合的な作業にも取り組ませしていきたい。併せて結果を数値化する等評価に客観性を持たせてもいきたい。

本報告と同様の産学連携の取り組みは、福岡国際大学の古市ら<sup>9)</sup>でも行われていたり、日野市産業まつりや小平市産業まつりをはじめ各商工会イベントにおいて「ものづくり体験コーナー」として平成21年頃より各地に広まっている。小さな市である稲城市とその市唯一の大学という関係もあり、地域貢献として大学に課せられる課題は他市と同様今後も発展し続けるであろう。また、こうした活動が平成16年度および平成17年度に大学教育高度化推進特別経費、平成20年から平成22年高度情報化推進事業、平成23年教育基盤設備に採択され、

活動をさらに後押ししてきた。本学科としては採択型の補助金を今後も積極的に利用しながら学校サイドとしてもより発展させていきたい。

- 1) 総務省『労働力調査(基本集計)平成27年(2015年)7月分』平成27年
- 2) 文部科学省『学校基本調査-平成27年度(速報)結果の概要-』平成27年
- 3) 稲城市商工会『第42回通常総代会議案書』平成24年
- 4) 稲城市商工会『第33回通常総代会議案書』平成15年
- 5) 稲城市商工会『第34回通常総代会議案書』平成16年
- 6) 稲城市商工会『第35回通常総代会議案書』平成17年
- 7) 稲城市商工会『第36回通常総代会議案書』平成18年
- 8) 稲城市商工会『第37回通常総代会議案書』平成19年
- 9) 古市恵美子, 平川幹和子「地域貢献活動による実践型情報教員養成」第22回情報処理教育研究集会講演論文集 pp241-244  
平成21年11月